工事常識 材料の研究と着眼点

建築材料見積の研究（5）

林　有　一

經驗の深い林氏が、筆に委せて長い間の研究を此所に趣味的に書き出さんとするものである。總て工事の經營は着眼點が大切である。二月號より精讀を乞ふものである。(編者)

北海道の木材

【廣茅六千餘方里】 を占むる北海道は、到る處森林に富み、針葉樹の產出も頗る多いのであるが、往昔は交通不便の爲めにかへりみるものもなかつた。

日清戰役や北清事變に、漸く覺醒した清國が鐵道事業を興すやうになつて、北海道から、ナラ、ヤチダモ、セン、カツラ等が、枕木用として輸出されるやうになつた。

日露戰役後漸次經濟界の恢復により、輸出旺盛となり、檜材の輸出が倫敦や歐洲大陸にも及ぶに至り、政府の十五年計畫で森林整理となり、固定國有林二百二十八萬町歩、公有林四十五萬町歩、御料林六十五萬町歩其他合計二百四十六萬町歩が、堅實なる發展を見るやうになつたのである。用材として主要な樹種たる。

【エゾマツ】 は高燥の地ならば到る處產出し生長緩なれども、大木となるもの多く高さ二十間、目通り直徑五尺に達するものがすくなくない。アカエゾマツは濕地にも產出し、平坦な濕地に一大純林を形成する所がある、高さ二十間、目通り直徑六尺に達するもの多く、エゾマツよりも紅味多く木理密である。トドマツは石狩、天鹽、北見に產出多く、一般に高燥の地を好む、これはエゾ松程の巨樹はすくない。其他セン、カツラ、シナ等何れも產出多く、就中センはケヤキの代用として用途廣く、美麗な杢紋あるものは頗る高價である。

渡島國龜田郡湯の川村に、白木神社といふ小祠がある、明治十年榎本武揚が建立したものであるが、この地内に比翼木と呼ぶ、トチの巨木があつた、樹齡千年以上、目通りの周圍十五尺乃至三十尺三株一體の珍樹である。

大正十二年九月の關東大震火災に際し、復興用材を北海道下川御料林の大森林から、伐り出した狀況は實に壯觀を極めた。御料林が割當てを受けたのは百萬石で、その内下川御料林で、十分の四を出材するのであるが、下川多寄の兩村で約八萬町歩ある、この地積内の立木石數は、針葉樹は一千九百十萬石、濶葉樹二千〇五十萬石、合計三千九百六十萬石の計算である、一町歩一ヶ年平均五石成長する割合から見れば、前記總面積八萬町歩で、毎年四十萬石づゝの成長を見るから、このやうな大仕掛けの伐採があつても、一年餘りで補償が出來るといふ。何しろ俄かに復興用材を短時日に、伐り出すのであるから、一時は二千人以上の人夫が、山入りをなし、柚夫一日の稼高が、平均二十石で五圓となる（一石二十五錢の割）この短期間に勞働賃銀ばかりでも、五十萬圓を仕拂つたといふ豪勢振りであつた。

【東京市場に於ける北海道材】 の相場は目下

松丸太長十二尺		中丸太一石			四圓五十錢
松角	〃			〃	五圓五十錢
栓角	〃	六尺	尺三	〃	九圓五十錢